

第13回 富山肝臓セミナー

日 時：平成9年10月17日(金) 18:30~21:00

場 所：富山第一ホテル3F 飛鳥の間

特別講演／「悪性胆道閉塞に対するステントの工夫」

関西医科大学 第三内科 久保田 佳 継

パネルディスカッション／「閉塞性黄疸に対する非観血的治療」

1. メタリックステントによる内瘻化

富山医科薬科大学 第三内科 岡 田 和 彦

当科では根治治療の適応とならない膵・肝道系の悪性腫瘍の症例に対してメタリックステントを用いた内瘻化を用い、高いQOLを保ったまま日常生活を送ることを目標に治療を行っている。

対象は64歳から89歳までの5症例で、臨床診断は肝管癌4例、膵癌1例である。いずれも重篤な合併症を持ち高齢のために根治的な治療法の適応がないと診断されており、十分なインフォームドコンセントに基づいて原発巣に対する治療は行わず、胆道ドレナージの処置を行った。通常の胆道ドレナージ処置により狭窄または閉塞病変の診断と減黄を行い、約1~2週間後に狭窄部を通してメタリックステントを留置して内瘻化した。

観察期間はステントによる内瘻化後2ヶ月から10ヶ月間である。2例は黄疸の発症をみることなく生存中(それぞれ10および5ヶ月間)であり、1例は合併症である喉頭癌のため7ヶ月後に死亡、1例は胆管癌の進行のため6ヶ月後に死亡、残りの1例は合併症である肺梗塞のため2ヶ月後に死亡した。死亡例については、病理解剖により留置したステントの開存が確認されている。肺塞栓を合併した例以外は、4~9ヶ月間の外来通院が可能であり、それぞれ発病前とほとんどかわらない日常生活を送ることが出来た。

2. 内視鏡的乳頭拡張術による総胆管結石の治療経験

市立砺波総合病院 内科 太 田 英 樹

総胆管結石に対して内視鏡的乳頭拡張術による治療を試みた。総胆管結石患者13例(男性8例、女性5例、年齢50~80歳)を対象に本法を施行した。そのうち胆嚢結石合併例は7例、胆嚢摘出後は1例であった。最大結石径5~20mm(平均12.9mm)、結石数1~7個(平均2.7個)であった。ERCPにひき続きガイドワイヤー下に拡張用バルーン(拡張径8mm)を挿入し、乳頭を拡張した。小結石はバスケット排石し、大結石は機械的碎石後、バスケットとバルーンで排石した。結石径が10mm以下の4症例は機械的碎石せずに排石された。一方、結石径が10mmを越える9症例は全例機械的碎石が必要で9例中7例で結石がすべて除去された。不成功の2例は総胆管に大結石の積み重なっていた症例を総胆管の屈曲したBillroth I法再建例でいずれもバスケット操作が困難な症例であった。合併症では軽度の膵炎と胆嚢炎が1例ずつみられたが保存的治療で軽快した。本法は安全で乳頭機能の温存も期待される有用な総胆管結石の治療法であるが、複数の大結石例では慎重な対応が必要であろう。

3. 閉塞性黄疸に対する内視鏡的胆道ドレナージ（当科における189例の検討）

富山県立中央病院 内科 里村吉威

1990年7月より1997年9月までの7年間に当科で経験した閉塞性黄疸の209例のうち内視鏡的胆道ドレナージを施行し得た189例について検討した。良性閉塞性黄疸は58例（総胆管結石54例，慢性膵炎2例，その他2例），悪性閉塞性黄疸は131例（膵癌48例，胆管癌46例，胆嚢癌12例，肝細胞癌6例，乳頭部癌5例，その他14例）であった。良性疾患ではいずれもENBDが施行されており，悪性疾患ではENBDが96例，ERBDが17例，EMSが18例施行された。今回，EMS施行例につきさらに検討を加えた。膵癌9例，胆管癌5例，胆嚢癌2例，肝細胞癌1例，肺癌膵転移1例（臨床病期Ⅲ1例，Ⅳ17例，平均年齢70.7歳）に対し，Srecker stent（6例），Wall stent（10例），およびDiamond stent（2例）を留置した。経過を追跡し得たStrecker stent留置4例とWall stent留置7例を比較すると前者（平均生存期間96.5日，減黄期間25.0日25.9%）に比べて後者（172.1日，123.6日71.3%）で良好な臨床経過が観察された。切除不能な悪性胆道閉塞に対するEMS，特にWall stentのようなself-expandable stentの留置は患者のQOLの向上に有用な方法であると期待される。

4. スtentによる閉塞性黄疸の治療

八尾総合病院 外科 高橋信樹

エキスパンダブルstentによる胆道狭窄の治療について検討を加えた。対象は過去3年間に経験した胆道狭窄非手術例13例であり，延べ21本のWall stentを留置した。原疾患は，膵・胆道系の癌7例，胃癌・結腸癌の再発3例，良性胆道狭窄3例であった。減黄効果から見た奏効率は85%であり，QOLから見た奏効率は92%と満足すべき結果を得た。stentの閉塞は5例に認められ，特に留置期間が100日以上 of 症例では63%にstentの閉塞が見られた。Wall stentはその減黄効果やQOLの面から見て極めて有用であるが，長期留置例の中には少なからず再閉塞が認められた。

5. 悪性胆道狭窄に対するWall stentの有用性

厚生連高岡病院 外科 平野 誠

悪性胆道狭窄に対するWall stentの有用性について検討した。症例は34～88歳で男12例，女9例の計21例である。疾患別には胆のう癌7例，胆管癌6例，膵癌3例，胃癌3例，その他大腸癌，乳癌肝転移のそれぞれ1例であった。stent留置部位はBm10例と最も多いが胆管空腸吻合部狭窄が3例あった。

その結果以下の結論を得た。

1. Wall stent留置法は，比較的簡便かつ安全な方法と考えられた。
2. 中部胆管狭窄には良い適応と思われた。
3. 減黄効果は良好で約60%の患者が退院可能となり，QOLが向上した。
4. 現在まで最長1年10ヶ月観察している症例があるが，長期的合併症は認めていない。